

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

イチジクの文化史

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4828

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

イチジクの文化史

池谷和信

イチジクは、アラビア半島から地中海沿岸にかけての地域が原産地であるといわれる。近年、ヨルダンの新石器時代の遺跡を対象にした考古学的研究から1万年以上前にすでに栽培化されていた可能性が指摘されている。

その後、この地でキリスト教が生まれるが、旧約聖書の創世記のなかでアダムとイブは自分たちが裸であることに気づいて、イチジクの大きな葉でつくった腰ミノで身体を隠したことが記されている。また、古代ローマではこの木は多数の果実をつけることから、多産や繁殖のシンボルにもなっていた。

日本には、江戸時代に中国から長崎に導入されたとされる。当初は薬用に使われていたが、その後は甘みを追求する果実として各地で普及して、最近では、腸の動きを増進するというペクチンを豊富に含むことから健康食品としても注目されている。



イチジクの大きな葉。地中海東部のキプロス島。ピーター・マシウ撮影。